

# 罪とゆるし

—— 『カラマーゾフの兄弟』を読む ——

(前編)

井田俊隆

## Abstract

This is the paper of a literary lecture for students at Ritsumeikan University. We read F. M. Dostoyevsky's work, *The Brothers Karamazov*, and looked into Dmitry's way of life, analysing his subconscious frame of mind. He leads an abnormal, roguish life and ends up being suspected of murdering his own father. At great cost of social failure he is awakened and eventually led to a blissful absolution. What is true about life-this is what I tried to impart to students through focusing on the hero.

**Keywords** : 潜在意識 (subconscious), 罪 (crime), 天使と悪魔 (angel and/or devil), 罰 (legal punishment), ゆるし (absolution)

ドストエフスキの『カラマーゾフの兄弟』はとてつもなく大きな作品で、しかもずいぶんむずかしい作品だと言って、読む前から敬遠する人が多いようです。だからといって、だれもがそ知らぬ顔をしていては、せっかくの偉大な文化遺産も宝の持腐れになって、あまりにも惜しい気がします。今回と次回はこの作品を考えてみることにします。だれにでもわかりやすいように解説していくつもりですので、みなさんもあまり構えずにわたしの話についてきてください。

ドストエフスキという人は一口で言うと、人間が真実に生きるとはどういうことか、これを大まじめに考えた作家です。彼は、既成の社会規範や宗教観念にとらわれずに、むしろそれらの根元に立ち返って、人間とは何か、神とは何か、罪とは何か、そしてゆるしとは何か、こういう問題を真摯に問いつづけました。そして、それらのいわば集大成として『カラマーゾフの兄弟』を世に問うたのです。

この作品の焦点は人間の魂の深層に当てられています。心理学的な言い方をすれば、人間心理の無意識の領域ということになると思いますが、ドストエフスキはそこまで降りていって、そこに見られる、理屈では割り切れない不合理な、しかしそれこそ真実だと言える、そんな人間の心の真実を見つけようとしています。そしてそれに気づくことによってほんとうの意味で神に通じることができるのだと訴えているようです。わたしたちもそういう心の奥にある真実をこの作品の中で追ってみたいと思います。

## 登場人物

最初に、作品に登場する主要人物を簡単に紹介しておきます。

まず、カラマーゾフ家の家長であるヒョードル。道徳心も信仰心もなく、金や色の欲のなかで生きるだけの卑しむべき人間です。一口で言うとそんな唾棄すべき男だけれども、人生を、彼なりに見て、知っているのです。神はいるのかいないのか。この問題についてどっちでもいいわけではない。はっきりと神を否定します。無信仰的ではなくて、反信仰的なのです。どうせ神もいなければ不死もない、それなら信仰も道徳も何の意味があるのか。人生なんて沈没船のようなものだ、救ってくれる者なんかだれもいやしないじゃないか、おれたちにあるのは死だけだ、それならもう楽しく生きるだけだと言って、自覚的に反信仰的な生き方をします。とにかく初老を迎えても、まだこんな調子で情欲をむき出しにして、女の尻を追っかけるそんないやらしい男です。

この父親から3つの魂が生まれます。それがカラマーゾフの兄弟です。それぞれ特異な人間タイプとして登場します。

長兄のドミートリは放蕩無頼の道楽者。軍の将校だったが、すぐに辞めてしまいます。そういう正規の生活が本質的に務まらない。放縦な生き方しかできず、羽目はずしてばかりで、とにかくやることなすことすべてが滅茶苦茶な男です。しかし、そんなならず者ではあるが、何か天性の美しい魂を内にもっています。一見おやじに似ているのですが、この点でまったく異質の人格なのです。ところが、本人はその内なるものに気づいていない。最後まで悪党になりきれないでいる自分にむしろ驚くばかりで、それがいったい何なのかがさっぱりわからないでいるのです。客観的には笑えてくるような話ですが、この滑稽にも見えるドミートリの自分との闘い、これはこの作品の重要なポイントで、わたしのこれからの話の骨格にもなってきます。

このドミートリにふたりの腹違いの弟がいます。イワンと末弟のアリョーシャです。

イワンは大学出の秀才で、無神論者です。頭脳明晰で、自分の頭で承知しないものはいっさい信じない人間です。知性、観念、理論、こういうものだけを頼りに生き、生活の実感を受け入れようとしません。実感だけで生きる長兄のドミートリとは正反対のタイプと言えます。彼は神の存在を証明しようとするが、証明しようとするほど、その反証しか得られず、膨大な神の反証体系を理論づけていくのです。

末弟のアリョーシャは、これまたイワンとは対極的なタイプで、敬虔なキリスト教信者です。知性とカ理論をいっさいもたず、心（つまり魂）の美しさ、温かさ、やさしさ、そういうものだけを抽出して生まれてきたような人格です。まるで天使のようです。宗教的稟質をもって、早くからゾシマ長老（この長老については後ほどあらためて触れます。）を慕って、修道院で生活をします。アリョーシャは知性や理論をもたないという点ではドミートリと似ていますが、やはりドミートリとは正反対のタイプです。アリョーシャが天使とすればドミートリは獣ですし、アリョーシャの宗教的稟質に対してドミートリは悪党的性向に生まれついているのです。

このようにカラマーゾフの3人の兄弟はお互いに対称的な人格をもって、ちょうど3角形の頂点のようにそれぞれがその特異な魂を発揮していくのです。この3人の兄弟とおやじの

ヒョードル、これら4人のカラマーゾフ家の男たちをベースに作品が構成されているのですが、この他にカテリーナとグルーシェンカという二人の女がいて、作品のテーマ上今紹介した4人に劣らない重要な人物なのですが、同時にプロット上でも欠かすことができない役割を果たします。この二人については、ここで紹介するよりも、この後わたしの話を進めるなかでその都度くわしく触れていく方がわかりやすいと思いますので、ここでの紹介は控えておきます。

## 梗概

この作品は今紹介しましたカラマーゾフ家の4人が展開する壮大な魂のドラマとして読まれるべきで、そういう読み方をして初めてこの作品はほんとうに迫力をもってわれわれに迫ってきます。むろん、彼らの魂のドラマを盛り上げるために物語の筋が巧みに組み立てられているのですが、筋のおもしろさはむしろ従的なもので、それに過大な期待をもって読むと当てはずれに終わるかもしれません。と言っても、その辺の小説よりははるかにおもしろいですが。

わが国でも明治時代には一風変わった推理小説といったふうに使われていたこともあります。それはそれでほほえましい時代だったと思いますが、もちろんこの作品はそんなのではない。あくまでも人間の魂のドラマであって、そこに感動を覚えずに読んでも、ほんとうに読んだことにならないと思います。このことを念を押した上で、話の順序として、以下簡単に物語の大筋というか、ざわりのところを紹介しておきます。

グルーシェンカという元娼婦がいます。非常に魅力のある女で、この女をめぐる父親ヒョードルと息子ドミートリが恋敵として張り合います。ヒョードルは彼女を金で釣ろうとし、ドミートリは金も何もないが、とにかく体当たりで、がむしゃらに惚れこむのです。

ある晩のこと、ドミートリは、グルーシェンカがおやじの邸に行ったらしいと、そう思いこんで、血相変えておやじの家まで駆けつけます。そしておやじの部屋の窓下の茂みに隠れて、グルーシェンカが来ているかどうかを確かめようと室内の様子を窺っています。

そのうち、この家の召使いグレゴリーに見つかって、やにわに逃げ出し、追ってくるグレゴリーを持ってきた杵でしこたま打って、自分も血だらけになってほうほうの体で逃げていきます。ところが、その夜何者かによっておやじヒョードルが殺害されるのです。そしてその直後、ドミートリが殺人容疑で逮捕されるのです。

客観的に見れば、どこからみてもドミートリの父親殺しははっきりしています。何しろ彼はあっちこちに借金をして、その金策に走り回っているし、日頃からおやじを殺してやると公言してはばからなかったし、とりわけ警察に見つかった時血まみれになっていたのですから。こうして、ドミートリを知る者はだれも彼の犯行を疑わず、彼は裁判で有罪判決を受けて、シベリアへ送られるのです。

話の筋を簡単に言えばこういうことなのですが、これではちっともおもしろくない。みなさんの中にはこの作品を読んでおられない方もけっこうあるのじゃないかと考えて、これからの話を進める上で最低これだけは知っておいてほしいと、前置きくらいの気持ちで紹介してみました。じっくり読んでいけばおもしろいところはいっぱいあります。スメルジャコフという男がヒョードル殺しの真犯人で、彼がこの殺人を巧妙に仕掛けたというところもおもしろいし、何よりもドミートリとかかわって登場する許嫁カテリーナと元娼婦グルーシェンカの描写も迫

力があって、それは読み応えのある作品です。しかし、この講義の趣旨はこの作品を全体にわたって楽しむというものではありません。あくまでもドミートリという人間—その人格というか生き方—を通して「何が本物か」を考えていくことです。ですから、わたしの話は彼にかかわる場面や人物に焦点を当てながら、彼の言動を追っていくことになります。

## ドミートリ

### ドミートリの二重性—悪魔と天使

先ほど登場人物の紹介のところでドミートリを、放蕩無頼のならず者ではあるが、天性的な美しい魂をもっていると述べましたが、そこるところから始めましょう。

一口で言うと、ドミートリは情熱の男だということです。そう言うと言えはよいが、それはほかでもない、獣だということです。彼の生活は情熱の中にしかない。己の情熱が導くがままに生きているのです。そういう生き方は動物の生き方と違いがありません。よいこと、悪いことの区別がないわけですから。善悪の意識がないのです。だから、喧嘩はする、借金はする、金は返さない、父親でさえ殺しかねない。万事こんな調子です。周囲の人にとっては、猛獣が放し飼いであるようなもので、危険きわまりない人物なのです。

彼には生活の羅針盤がないのです。普通の人間は道徳とか社会規範という観念がある。そういう羅針盤に従って生きていくわけですが、彼には道徳とか社会規範というものがまったく通用しない。こうして、好き放題をして、悪党、ならず者の生き方をします。彼の中にはそんな悪魔的要素がうごめき、ひしめいているのです。

ところが、そういう悪魔的側面に対して、他面ではまるで子どものような純真さがあります。どれほど悪党振りを発揮しても、最後のところでは絶対に嘘は言えないという誠実さというか、真実の心があります。また、人間として、男として失うことができない名誉心・高潔さがあって、それが人間として越えてはならない最後の一线で彼を踏みとどまらせるのです。そんな天性的な真実の心—ドミートリの天使的要素と呼んでおきましょう—がいざとなると彼の心の奥深くで力を発揮するのです。

このように、相反するふたつの要素、悪魔的要素と天使的要素が複雑に、というよりも混沌と入り交じって、ドミートリはさしずめ道化のような人生を演じさせられることになるわけですが、ドストエフスキはこの男を通して「何が本物か」を読者に訴えようとしているようです。その辺をさらにくわしく見ていきましょう。

### 婚約者と恋人

ドミートリにカテリーナという婚約者がいます。ドミートリとは似ても似つかぬ、およそ天と地ほどかけ離れた淑女です。教養もあり、敬虔で、道徳心篤く、まさに理想の淑女なのです。世間からは高貴な魂をもった婦人という誉れ高い評価を得ており、ならず者のドミートリとは対称的な人物です。それほど淑女がどうしてドミートリの婚約者になったのかについては後ほど説明するとして、とにかくこういう婚約者がドミートリにいます。

それなのに、ドミートリはグルーシェンカという娼婦上がりの女に恋をするのです。このグ

ルーシェンカというのがまたカテリーナとは対称的な女で、今はもう娼婦ではないが、金貸しのようなことをして、世間からは汚い女、軽蔑すべき女という、カテリーナとは正反対のレッテルを貼られているのです。ドミートリはその女に惚れ込んでしまって、自分でもどうにもならなくなっているのです。

資料1はそんなドミートリの心境がよく表れています。

### 【資料1】

(A) おれはこうして進んで行きながら、自分が悪臭と汚辱に踏みこんでいるのか、それとも光明と喜悅の中へはいつているのか、自分でも見分けがつかないのだ。こいつがどうもやっかいなのだ。じっさいこの世の中ではいつさいがなぞなんだ！おれがじつに恐ろしいけがれた墮落の深みへはまって行くとき（しかも、おれはこんなことよりほか何もしないのだ）、おれはいつもこのケレスと人の子をうたった詩を読んでみる。ところで、それがおれを匡正したことがあるだろうか？決して決して！なぜって、おれはカラマーズフだものなあ。(B) 無限のふちへ飛びこむくらいなら、いっそ思いきってまっさかさまに落ちるがいい、という気になるんだ。しかも、そんな恥ずかしい境界に落ちぶれるのに満足して、それを美的だと考えるようになる。ところが、(C) こうした汚辱のただ中であって、おれはとつぜん、賛美歌をとえはじめるじゃないか。よしや自分は、のろわれた、卑しい、けがれた人間であるとしても、神さまのまとうておいでになる衣の端を、接吻したってかまわないはずだ。しかも、それと同時に悪魔の跡へついて行こうとも、おれはやはり神さまの子だ、神さまを愛する、そしてよろこびを心に感じる。このよろこびがなかったら、世界も存在することはできないのだ。

よこしまな恋をする自分、どうしてもカテリーナを裏切ってグルーシェンカを求めてしまう自分、そんなどうしようもない自分の心の内を末弟アリオシャに打ち明けている場面です。

### 地獄への道

高德な婚約者カテリーナを拒んで、元娼婦のグルーシェンカのところへ行くということは世間の尺度からすれば正気の沙汰ではない。カテリーナと結ばれば、地位も名誉も金もある。一方、グルーシェンカといっしょになれば、ますます世間における自分の株を下げることになるわけですから。しかも、グルーシェンカがもう自分のものになっているのならまだしも、今のところまだドミートリの方が熱をあげているだけなんですから。

グルーシェンカはまだドミートリを愛しているわけではありません。いや、ぜんぜん彼を問題にしていないのです。いくら彼が彼女のところへ足を運んでも、彼女はついていきますとも何とも言っていないんです。

これが浮気というのならよくわかります。世間にはそんな話はいくらでもあります。婚約者は婚約者、遊び女は遊び女というわけです。ドミートリはそんな器用なことはできません。とにかく彼はカテリーナを捨てて、グルーシェンカの許に行こうとするのです。自分にはこの道しかないのだと思って。



さて、資料1に戻って、冒頭の下線部Aを見てください。

ドミートリ自身、カテリーナを捨ててグルーシェンカの許へ行くことが墮落なのか真実なのかわからないでいます。普通の間人ならわからないはずがない。「悪臭と汚辱」と「光明と喜悅」、つまり地獄と天国なわけで、これほどはっきりとちがうものはありません。にもかかわらず、彼には見分けがつかないのです。こういうことが彼の心の中でじっさいに起こるのです。とにかく、何かよくわからないが、心にやみがたいものを感じて、グルーシェンカのあやしい魔力に引きずられていきます。この抑えがたい実感（情熱のことですが）をうち消すことは彼にはとうていできないのです。実感だけが彼の生活の証なのですから。

下線部Bでは、ドミートリは開き直っています。これが地獄への道だとしても、それならそれでいい。いっそのこと「まっさかさまに落ち」ていってやると言います。悪魔に魅入られているのだとしても、ほかにどうしようもないのだというわけです。

### ドミートリの天賦的要素

しかしながら、ここがドミートリ的人格というか人間性を物語るもっとも重要な側面なのですが、そうは言いながらも、彼はやっぱり真実なもの、神聖なものを心の中に抱いているのです。下線部Cのところでは。

地獄へ真っ向に飛びこもうとする時であっても、こうした魂の美しさか頭をもたげるのです。ドミートリという人間はこの辺がほんとうに不思議なんです。もちろん、ドミートリ自身、なぜそうなのか、わかっていない。つまり、どっちがほんとうの自分なのか—悪魔の後を追うゴキブリのような自分がほんとうの自分なのか、それとも神の袈裟に接吻したくなる自分がほんとうなのか—それが自分でもさっぱりわからないのです。

ここのところを読者サイドからもう少し考えてみましょう。ドミートリという人間の心を意識の世界と無意識の世界とに分けるとすれば、どういうことが言えるか。

意識の世界では、ドミートリはすべてが滅茶苦茶です。自称自認のならず者、無頼漢です。自分が立派で正しい人間であるとか、道徳心があるとか思っていません。意識の世界では、そんなことはぜったいないと思ひ、かつ自覚しているのです。

ところが無意識の世界では、それだけでないものが必ず顔を出すのです。何か天賦的なもの、そういうものがわれ知らずふっと頭をもたげるのです。それがあつたために最後の最後のところで踏みとどまることができるような何か、それによつて真実の心、つまりほんとうの自分というものを見出すことができそうな何か、そうした善的な何かがあつた彼の奥深くにあつて、それが無意識の内に起動するのです。

ドミートリ自身はそれが何か、ぜんぜんわからない。そこがいかにもドミートリらしいところなのですが、自分はならず者だと思つているわけだし、そんな善的なものが自分にあるなどは夢にも考えたことがないのです。だから、そういうものが顔をのぞかせると、何かひじょうに不自然というか、突拍子もないものに思えるのです。戸惑いさえします。それで、わからないとか、謎だとか連発します。こんなのは偶然だとか言ひます。そうです、大体が偶然で片づけてしまうのです。

弟のイワンは知性や理論だけで生きていると先にも言ひましたが、もしもドミートリに理論

とかそういうものがあつたら、そんな自分を分析し、自分の心の奥深くにあるそうした善的要素にたどり着くことができたでしょうが、彼にはそういう理論がありません。だから結局、偶然なんだということ片づけてしまうのです。

### 神を求める心

このように、ドミートリはどんなに放蕩無頼の悪行を重ねても、最後のところでは心の底からおのずと「神の子」であることができるのです。きわめて素直に神の胸に飛び込める心がちゃんと具わっているのです。この神を求める心、いわゆる宗教心ですね、これについては結論のところであらためて触れますが、ちなみにこの宗教心に関して、カラマーゾフの3兄弟でどうちがうか、それをここで見ておきます。

末弟のアリョーシャは根っからの宗教的心情をもって生まれついた人格です。小さい頃から修道院のゾシマ長老に私淑し、何を見ても何をしていてもいつもそこに神がいるのです。しかし、アリョーシャを見ていると、もう天使そのものという感じで、何か人間離れています。ドストエーフスキはこのアリョーシャによって神を求める心を極端な形で、つまり一つの典型として描いていますが、しかし人間というものはじっさいそんなものではない。もろもろの罪や過ちや悪行の中で苦しんだり、嘆いたりしながら生きているわけです。そういう中で神を求めるというのがより真実な姿ではないでしょうか。その意味で言いますと、ドストエーフスキがこの作品で本命とした登場人物はアリョーシャではなくて、やっぱりドミートリであったような気がします。彼によって、より自然な形で、神を求める心を描き出そうとしたようにわたしには思われます。

次弟イワンの場合はどうでしょうか。イワンは普通無神論者ということになっています。では、彼は神をぜんぜん求めなかったのでしょうか。

イワンにも心のいちばん底には神がいるのだと思います。やはり神を求めているのです。けれども、ドミートリのように何かよくわからんが神を感じてしまうといった、そんなふうでは彼は落ち着けないのです。

彼は頭脳明晰で、研ぎすまされた知性の持ち主です。したがって、理論でもって神が証明されないかぎり、とても信じることができないのです。さりとて、証明されないからといって、簡単に諦めることもできない。ここがイワンの深刻なところなのです。

神が証明されない、それで諦めて無神論に走る。そういう生き方ができれば、むしろ救われたことでしょう。普通の無神論者はそうなのです。イワンはそういう単純な無神論者ではありません。心の深奥にやはり神がいて、それが彼の頭からぜったい離れない。離れないがゆえに、また神を証明したく思う。しかし証明しようとするほど、その反証しか得られない。どんなに求めても神の实在という証しが見つからないのです。こうして、彼は神に対する膨大な反証の体系を打ち立てていくのです。

結局のところ、イワンは実感を信じようとしません。毎日の生活自体がそうなのです。いや、生活の実感がないわけではありません。人間としてよろこびや悲しみを感じたりすることはする。ただ、それが生活の原動力にならないのです。それらに感動を覚え、その感動をエネルギーにして行動にまで走れないのです。ひるがえって、彼は理論とか分析だけで生きよう

とするのです。知性しか信じられないのです。この知性が実感（つまり生活感情）を抹殺してしまうのです。

神を求める場合でも同じです。なるほど神は存在しないと断言はしますが、しかし、それがつらいのです。それでもひょっとして神はいるかもしれないと思ってしまう。やっぱり神が欲しいのです。これが彼の実感です。しかし、案の定知性がそれをあえなく拒否してしまうのです。人一倍求めているながら知性によってそれが拒否される。これがイワンの地獄なのです。わたしのいわゆる知性の悲劇と呼ぶところのものです。（これについてはまた別の機会に話すつもりです。）

この点、もう一度ドミートリを振り返ってみますと、彼は正反対です。自分でもわけがわからず、無意識のうちに神を感じてしまう。その感じ方は少しも論理的でなく、思考というものがぜんぜん入ってこない。しかしはっきりと神を感じるのです。つまり、実感がそう感じさせるのです。それで、最後のところではちゃんと神の胸に飛びこんでいけるのです。これがドミートリなのです。

## カテリーナ

### ドミートリのカテリーナに対する憎悪

これでドミートリという人物像の輪郭をある程度つかんでもらえたと思います。次にカテリーナについて考えてみましょう。カテリーナとはどんな女か、ドミートリはこの許婚者をどう見ていたか、その辺の話になります。

先ほど少し触れましたように、カテリーナは教養もあり、高德で、だれ目から見ても非の打ちどころのない淑女です。それほど女性がどうしてドミートリのような無頼漢と婚約することになったのか、ここから入っていきます。

カテリーナは軍の中佐の娘で、父親が軍の公金4500ルーブルを、汚職とかそんな悪事に絡んでのことではないのですが、ある商人に貸してやります。ところがその金が返ってこず、中央から帳簿の監査にくるといふことで、苦境に立たされます。その4500ルーブルがすぐに用意できないと、父親のみならず一家の地位も名誉も破滅してしまうというわけです。

ドミートリはたまたまこの内輪の事情を知って、カテリーナの姉に向かって半ば冗談で、ちようど母親の遺産の一部として6000ルーブル父親から送金があって、それが今手元にあります、妹さんをぼくのところによこしませんか、もし来られたら4000ルーブルを妹さんに差しあげますよと、こんなふうなことを言います。これは、言われた方にしてみれば、大きな侮辱です。

そもそも、カテリーナは都のある貴族的な専門学校を卒業して、今度この町に帰って来たのですが、どこへ行ってもちやほやされます。「しっかりした気性の、誇りの強い、心底から徳の高い、知恵も教養もある淑女」として、社交界の花形、押しも押されぬ貴婦人です。それで、ドミートリもそんな彼女に惚れていたです。貴婦人だからというのではなくて、やっぱり彼女の美貌に参ってしまうのです。大体が惚れっぽい男ですから。いや、あまりいい言い方ではありませんね。言い直しますと、彼は実感で生きる男です。実感で生きるということは情が深いということ、激しいということ。美しいと思ったら、そのまま突っ走るのです。



そうこうして、彼は何としてもカテリーナに近づきたいと思い、ある夜会でちょっと話しかけてみたところが、彼女はろくろく目もくれないで、人を小馬鹿にしたように口を結んでいるだけなのです。何しろ彼女は高みにいることに慣れた女ですから、ドミートリなんかぜんぜん問題にしないわけです。それでドミートリは、くだんのとおりならず者ですから、よし見てろ、仕返しをしてやるとくるわけです。彼の中の悪党的なカラマーゾフの血が騒ぎ出すのです。

そういうことがあって、中佐一家が苦境にあえいでいると聞いて、先ほどのところに話は戻って、彼は姉に向かって、お金を差しあげますから妹さんをぼくのところへよこさないというわけです。

ドミートリはまさかカテリーナがやって来るとは思っていなかった。ところがじっさいにやって来たのです。どうしてやって来たのか。

結論を先に言えば、それはほかでもなくカテリーナの高徳さのゆえなのです。高徳な女だから、父親の犠牲になることをいとわない。むしろそれこそ神の教える道だと彼女は考えるのです。身も心もすべて放棄して、ゴキブリのような男の前にひざまづく覚悟でやってくるのです。何をされてもかまわない、これも父を救うためなのだというわけです。

そういうわけだから、ドミートリにしてみたら、彼女をどうとでもできるのです。彼は自分の性根がカラマーゾフ的で、悪党だと自認しています。相手が高徳であるのに対して自分はゴキブリなんだとやけくそになっています。だから、カラマーゾフのどこが悪いと開き直って、結婚とかそんな殊勝なことはそっちのけで、ただ遊んで捨てるだけでもいい、相手はそれを自分から望んできているんだから、とこういうふうにも思うのです。

あるいは、正式に結婚しようと思えば、今ここで金だけ渡して、明日堂々とプロポーズに行けばいい、そうすれば汚い話は縁切りにして円満に自分だけのものになる、とこうも思うのです。

あるいは、冗談でしょう、100や200ならよこんで差しあげますが、4000ルーブルですよ。ちょっと虫がよすぎじゃございませぬかと小気味よくあざ笑ってやれば、さぞ気持ちがよからう、とこうも思うのです。

とにかく、ドミートリはこういったことを息も詰まるくらいの興奮で次から次へと考えるのです。ところが、カテリーナと言えば、そんな自分の目の前ですなおに、おとなしく、いかにも殊勝げに坐っています。そんなカテリーナを見ると彼は無性に腹が立ってきます。その時の心境をこんなふうに言っています。

おまえ、ほんとうにすまいが、おれがこういう場合、相手の女を憎悪の念をもって、にらむなんて、そんなことは、どんな女にたいしてもありゃしなかったのに、一ところがその時ばかりは、あのひとを3秒か5秒ほどの間、恐ろしい憎悪をいだきながら見つめていた。まったくだ、誓ってもいいよ。しかしその憎悪こそは恋、一それこそ気がいじみた恋と、わずか間一髪を隔てたようなものだった！

ドミートリはカテリーナにすっかり惚れこんでいます。それなのに、このように憎悪をもって彼女を凝視します。恋と紙一重のこの憎しみ、これはいったいどういうことなのか。どうして彼はこれほどカテリーナに憎悪を覚えるのでしょうか。

### カテリーナの傲慢さ

やはり結論から言いますと、カテリーナがドミートリに屈辱を与えるからです。カテリーナの傲慢さに彼は耐えられないのです。

どういうことか、もう少し説明しますと、ドミートリはカテリーナを焼いて食おうが、なぶり殺しにしようが、好きなようにできるのです。彼女は父親の犠牲になるという高い使命を抱いて、それを承知の上でやって来ているのですから。彼女はそんな聖女の落ち着きで彼の前にひざまづいている。問題はここのことです。どうせあなたはならず者、さあ早くわたしをどうとでもしてください、ゴキブリはゴキブリくらいの行いしかできないでしょう、とこんなふうにかテリーナが言っているようにドミートリは感じるのです。ドミートリにとってはこれほどの屈辱はありません。まるで自分が最下等の人間に扱われているみたいで。

ところが、じっさいのドミートリはどんなであったかと言いますと、先ほども触れましたように、どうにでもなる相手を目の前にしてあれこれ想念するわけです。悪魔のように振る舞うこともできれば、天使を演じることもできたわけです。そんなふうにもいろいろのことを考えて、彼の内心は動揺します。悪党ではありますが、最後のところでは悪魔になり切れないで苦しみます。それなのに、カテリーナはそんな自分を知らないでいる。いや、知ろうとせずにいるのです。そういうカテリーナの無神経さがどうしようもなく腹立たしく思うのです。

ドミートリの心の中をぜんぜん知ろうとしないで、自分だけは父親を救う使命を負った最良の人間として、もっぱら身勝手に高貴な行いを演じるカテリーナ、しかも今自分のような最下等の人間のなぶり者になることに満足を覚えている様子さえ見せるカテリーナ、これはもう傲慢以外の何ものでもありません。ドミートリはカテリーナのそういう傲慢さを直感的に見抜いているのです。だから、ドミートリは我慢がならないのです。殊勝な顔をしていればいるほど憎悪が湧いてくるのです。

結局、ドミートリはどうしたかと言いますと、何も言わずに、黙って小切手をカテリーナに手渡し、戸口で最敬礼をして丁重に彼女を送り出します。それだけです。

その後、カテリーナはある遠縁の者の死によって莫大な遺産が入り、4000ルーブルをドミートリに返済するとともに、今度は彼女の方からドミートリに結婚を申し込むのです。二人の婚約のいきさつは大体こんなところです。

### カテリーナの愛

こうしてカテリーナは婚約者としてドミートリに愛を誓い、献身を誓うのですが、それで終わればこの物語は安っぽいメロドラマになってしまいます。むろんそんなことで終わるはずはなく、むしろここから話が始まると言ってよいでしょう。

それでまず、カテリーナはドミートリにとってどんな婚約者であったか、そこから考えてみましょう。

カテリーナはドミートリに次のような手紙を送っています。

わたしは気ちがいのように恋しています。あなたがわたしを愛してくださなくてもかまいません。どうぞわたしの夫になってください。しかし、お恐れになることはありません。

わたしはどんなことがあっても、あなたを束縛はいたしません。わたしはあなたの道具です。あなたの足に踏まれる絨毯でございませぬ……わたしは永久にあなたを愛しようございます。あなたをあなた自身から救ってあげたいのでございませぬ……

カテリーナは結婚を決心して、ドミートリにこのように捨て身の愛を誓うのです。一見これほど貴い愛はないように見えます。しかし、もうすでにここにカテリーナの傲慢さが透けて見えます。

自分を犠牲にしてドミートリに献身的に尽くしたい、そうすることによってドミートリを立ち直らせた、それが自分に与えられた道なのだ、とこうカテリーナは信じているのです。ちなみに、これは、『ボヴァリ夫人』の講義で言及しましたが、あの主人公エマとは対称的です。エマはこの自己犠牲というものがいっさいない。自分の愛の実感、それだけが生きがいです。だから、相手が自分とともに墮落しようが破滅しようがお構いなして、ひたすら胸の火を燃やし尽くすことだけを願うのです。カテリーナの場合はそれがまったく逆で、女としての愛の実感よりも、高德であるためのみずからとるべき道を優先させるのです。こうあるべきだというものが先ずあって、それによって自分を行動させるのです。愛のよるこびや哀しみ、こういう真実の自分を押し殺してしまうのです。これはそれ自体としては貴い生き方かもしれません。しかし、そこにじつは傲慢さが潜んでいるのです。

問題は、カテリーナは一体何を愛しているのかということです。端的に言っても、彼女はドミートリを愛しているのではないのです。彼女の愛しているのは道徳性なのです。自分の中の高德なものだけを愛しているのです。ドミートリがどうであろうと、彼がどれだけ苦しもうと、ひたすら自分の道を信じ、それを平気で相手に押しつけていくのです。さらに言えば、高德であるという自分の優位性を愛しているだけなのです。ですから、自分とドミートリとの落差が大きければ大きいほど、カテリーナにしてみれば自分の献身がいっそう貴いものに思えてくるわけですね。言い方は悪いが、自分の高德を誇るためにドミートリを出汁にしているとさえ言えそうです。

はっきり言って、カテリーナの献身はひとりよがりなのです。彼女は自分を殺すわけですが、それによってドミートリが生き返るのなら、自分も生きたことになります。自分の献身的な愛によってドミートリの愛が育ち、それが今度自分に戻ってくる。それによって自分自身も生かされてくる。ほんとうの献身的な愛はそういうものであるはずなのに、じっさいはそれが逆に働いているのです。自分が捨て身になればなるほど、ドミートリの憎しみを買うことになります。これでは彼女は少しも生きたことにならない。にもかかわらず、そうとは知らずに、彼女はじつに無神経に献身振りを発揮しつづけるのです。これはいわば愛の押し売りです。ドミートリにしたら、そういう愛を押しつけられれば押しつけられるほどカテリーナが憎らしくなり、逃げ出したくなるのです。それでもカテリーナは押しつけてくるのです。カテリーナの愛にはこういう傲慢さがあるのです。

### カテリーナの二重性—高德と傲慢

人間は善悪の両面をもっています。わたしはそれを人間の二重性と呼んでいるのですが、カ

テリーナの場合も高德と傲慢という相反する要素が彼女の中にあるのです。問題はそれが別々にあるのではなくて、表裏一体をなして併存しているということです。だから、彼女は高德な生き方をしようとするのだけれども、そういうふう生きることで自分がそのまま傲慢を生きることになってしまうのです。皮肉なことですが、そこが人間のおそろしいところなのです。

どういふことかと言いますと、高德とか献身というのは美しい衣です。その下に傲慢さという鎧が隠れています。最初から下の鎧が見えておれば何もこわくない。傲慢だけで生きているような人はそれだけの人間で、それほどこわくない。しかし人間というものはだれでも傲慢そのものを生きるわけではありません。何かの陰に隠れて傲慢さが潜んでいるのです。何かとは、たとえば高德であったり、信仰であったり、主義・主張であったり、慈善であったりします。そうした一見美しい衣の陰に隠れて、傲慢さが平然と人を攻めたり裁いたりするのです。そこがこわいのです。カテリーナも今のところ高德という衣に隠れて、そのおそろしさは包み隠されていますが、やがてこの衣の下のほんとうの姿を現すところがあります。次回、その場面に来たら、もう一度カテリーナのおそろしさを考えてみるつもりでおります。

#### ドミートリの直感

以上、カテリーナの傲慢さを考えてきましたが、これはわたしたち読者の分析です。ドミートリ自身はカテリーナについてそういう分析は何もしていません。今わたしたちが分析してきたようには、彼はカテリーナがわかっていないのです。それでただ、憎らしい女だとか、あの高德さだけはどうしようもないとかくり返すばかりなのです。

自分自身についてもこんな調子だったのを思い出してください。先にも触れましたように、悪党でならず者である彼は最後の一线のところでは、何か天使的なものが顔を出して踏みとどまるのですが、そこでも、自分がどうなっているのか、自分で自分がわからず、これは謎だとか偶然だとか言って片づけておりました。ここでもあの場合と同じで、なぜ高德なカテリーナが憎らしいのか、少しもわからない。それで、彼女を憎らしく思うのは自分が卑劣漢だからだろうか、これはきっとさもし嫉妬からなのだろうかとか言うばかりで、それで済ませてしまいます。いかにもドミートリらしいところだと思いますが、こんなふうにして、何かよくわからんが、このどうしようもない憎悪と狂気じみた恋とがごっちゃになって彼は苦しむのです。

たしかにその通りです。ドミートリは、自分の憎悪がカテリーナの高徳なるがゆえの傲慢さに起因しているというふうにはわかっていません。それがわかっているのはドストエフスキと読者だけです。しかし、こうは言えると思います。つまり、彼はそれに直感的に感じていたにちがひありません。実感だけに生きるドミートリはいわば動物的嗅覚をもっているのです。彼は鋭い嗅覚をもった犬のようなもので、カテリーナのそうした傲慢な虚偽性を嗅ぎつけて、うんうん唸るわけです。少しも分析的でないけれども、とても正確にカテリーナの嘘を見抜いているのです。彼の憎悪はそんな犬の唸り声だと言えます。

今日はここで終わりとしますが、以上のようなカテリーナと対称的な女として登場するのがグルーシェンカです。グルーシェンカはどんな女でしょうか。次回はそこから始めたいと思います。

(次号につづく)